

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第19回 佐野公一 神田外語学院初代学院長
日本を想い、人づくりに懸ける



神田外語学院の創立者、佐野公一先生は、日本の若者たちが世界と渡り合う能力を引き出したいという信念のもと、学院を日本最大の外国語の専門学校にまで育て上げました。本サイトの証言、そして生前に公一先生が語った雑誌記事の言葉に、その人生を探っていきます。（構成・文：山口剛/文中敬称略）

明治38（1905）年、佐野公一は静岡県富士郡稲子村で生まれた。現在の富士宮市である。富士川に注ぐ稲子川沿いに位置する山間の村落で、川沿いの急峻な山肌に棚田が拓かれていた。公一の家は屋号を「新家（にいや）」と言った。分家である。兄弟は8人。農家の暮らしは決して豊かではなかった。

公一は家業を手伝った後、上京して中央大学法学部に入学した。中央大学は大正12（1923）年9月の関東大震災によって神田錦町の校舎を消失。昭和元（1926）年8月に現在の駿河台に移転した。公一が18歳から21歳の時期に重なる。若き日の公一は震災から復興する東京で法学を学んでいた。



写真下：雑誌『文藝春秋』に登場した
佐野公一先生。（「大蔵トップ対談
私はこうやる神田外語学院」『文藝春秋』、
文藝春秋、昭和52年3月号より）

苦学生だった公一は法律家にはならず、実業家の道を選んだ。昭和6（1931）年、26歳で黒田きく枝と結婚し、一男三女に恵まれた。きく枝は、福井県鯖江市の出身で東京で小学校の教員をしていた。昭和9（1934）年生まれの子供であり、後に両親の跡を継ぎ佐野学園の理事長となる佐野隆治は、幼い頃、父が洋服屋の外商をしていたと証言している。一家は駿河台に住んでいた。

昭和10年代半ば、隆治が尋常小学校に入った頃、家族は上野の上車坂（現在の目黒7丁目）へと引っ越した。30代前半の公一は、独立して「佐野商店」を興したのだ。佐野商店は、足立区の西新井に鉄工所を持ち、航空機メーカーの荳場（かやば）製作所に機械部品を納めていた。

昭和19（1944）年の後半から戦況が悪化し、東京への空襲も度々重なるようになった。子どもたちは地方に集団疎開した。昭和20（1945）年3月10日未明、東京上空に飛来したB29が下町を焼き尽くす大空襲で、一晩でおよそ10万人が亡くなった。佐野商店があった上野駅周辺は奇跡的に焼け残った。

昭和20年8月15日正午、公一はきく枝とともに日本の敗戦を告げる玉音放送を聞いた。（17）

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第19回 佐野公一 神田外語学院初代学院長
日本を想い、人づくりに懸ける



人々の求めるものを察知し
いちはやく商いにする才覚

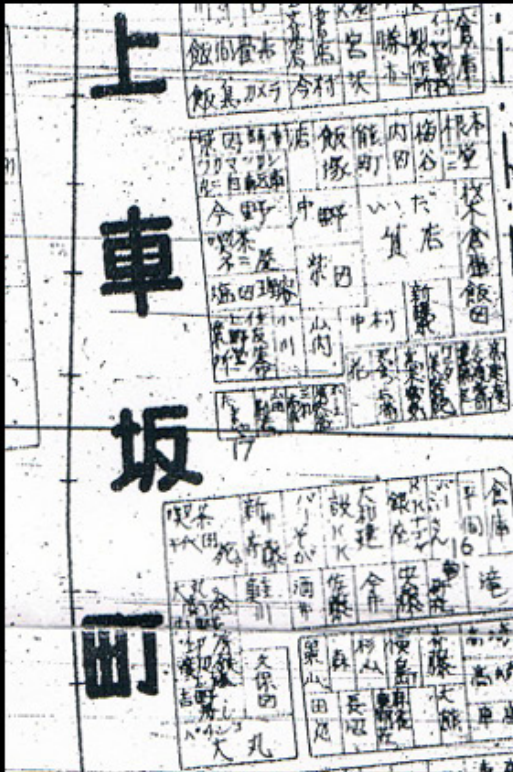
公一は愛国心の強い男だった。もし、アメリカ軍が上陸したら、戦おうと短剣を用意していた。終戦のすぐ後に行われた選挙にも立候補した。あえなく落選したが、国を想うからこそその行為だった。

公一は戦争を通じて、外国語教育の必要性を痛感した。雑誌『文藝春秋』に掲載された評論家の草柳大蔵との対談で、公一はこう語っている。

「外国語が必要だと痛切に感じたのは太平洋戦争の時からですね」「あの時の外務大臣松岡洋右がもっと語学がたんのう（堪能）で、外国の国情に明るかったら、我々にもっと有利な結果が出たのではないかと思えたのです」「人間社会は人と人の和ですからね。まず話し合っ、相手のことをよく知る。それには言葉ですよ。世界の中の日本として考え、国際人として立たなければ日本の将来はない、とまあこう考えたわけですよ」（※1）

終戦後、営業を再開した佐野商店は、クワやスキを作り、売った。焼け野原の土地を片付ける人々は道具を必要としていた。その次は鍋や釜。住まいが確保できれば、煮炊きの道具を求める。ライターなどを輸出する貿易業へも事業を広げた。公一は、世の中が求めるものを察知し、提供する才に長けていたのだ。

写真上：神田外語大学1号館エントランス
にある佐野公一先生の胸像
(撮影：塩澤秀樹)



写真下：昭和37年と思われる上野・上車坂町の住居地図。太字の「坂」の文字の下に「喫茶苑」と表示されている。

（『東京都全住宅案内図千代帳』、住宅協会、発行年不明より）

昭和25（1950）年頃になると、公一は新たな事業を始める。喫茶店だ。この時期、コーヒー豆の輸入が再開され、戦後の喫茶業が本格化していく。貿易業を営んでいた公一はその先駆けをいこうとした。佐野商店を改築し、「千代田苑」を開店した。店を切り盛りしたのはきく枝と隆治。高校生になった隆治は夏休みに先輩の働く浅草の喫茶店でバイトをして技を身につけた。公一はいつも号令をかけるだけで、きく枝や家族が段取りを組むのが常だったという。

千代田苑は、上野の1号店を皮切りに、入谷、神田へと店舗を出していく。神田店を仕切っていたのは、慶應義塾大学に入学した隆治であった。（27）

1. 「大蔵トップ対談 私はこうやる 神田外語学院」（『文藝春秋』、文藝春秋、昭和52年3月）より。

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第19回 佐野公一 神田外語学院初代学院長
日本を想い、人づくりに懸ける



敗戦から12年で外国語学校を実現 手探りで学校経営に取り組む日々

前出の文藝春秋の記事には「昭和32年 セントラル英会話学校開設」とある。この年、公一は何らかのかたちで外国語教育に乗り出したようだ。敗戦から12年。戦時中、日本という国を守るためには外国人と対等に渡り合う必要があると痛感していた公一は、ついに外国語教育に乗り出した。52歳だった。

事業では成功を収めてきた公一だったが、学校経営の経験はなかった。手探りの時期が続いた。きく枝の親戚に、後に佐野学園の監事を務める山岸秀豪がいた。山岸は公一の母校である中央大学を卒業後、明治生命に入社。東京勤務を経て、関西へ転勤したが、出張で東京に来るたびに上野・池之端にある佐野家に泊まった。公一は自分の子と同じくらい歳の離れた山岸の話を熱心に聞いた。

「公一先生は、すでに事業家として成功を収めていたけれど、それはあくまで個人での仕事を中心だったから、大きな組織はあまりご存知なかった。一方で、学校を経営するとなると組織の運営ができなければならない。ですから、僕の勤めていた明治生命や三菱グループの様子などをお聞きになっていました」

写真上：昭和46年の海外研修の壮行式。
神田外語は海外留学にも積極的に取り組んだ。
(神田外語学院校友会『平和の礎』より)



写真下：草柳大蔵氏と対談する佐野公一先生。（「大蔵トップ対談 私はこうやる神田外語学院」『文藝春秋』、文藝春秋、昭和52年3月号より）

公一の学校経営は、神田の「千代田予備校」から始まった。この予備校は、東京大学の学生が受験指導を行う「東大文化指導会」のメンバーが主だったが、中心的な講師が駿台予備校に移ってしまった（※2）。神田で喫茶店を営んでいた公一は何かの縁でその予備校を引き継いだ。学校では受験クラスを残しながら、英会話クラスを設けた。後に神田外語大学教授となる池田弘一は、この予備校の講師として校長の佐野公一に出会った。昭和37（1962）年のことだ。

「最初の頃は、何しろ学生がいなかった。あるとき、ちょっと早く学校に着くとシャッターが開いていない。すると、公一先生がいらっしやっで、鍵を開けてくださった。始まる時間になっても生徒は誰も来ない。公一先生は『もう少し待っててやってくださいませんか。きっと来ますから』とおっしゃるんです。あの方は顔つきが怖くって、みんな怖がっていたけど、本当は優しいかった」（37）

2. 江利川春雄『受験英語と日本人』（研究社、2011年）P292

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第19回 佐野公一 神田外語学院初代学院長
日本を想い、人づくりに懸ける



私財を投じ、学校法人を設立 名前を変え、公人となる決意をした

昭和38（1963）年になり、公一は校舎の拡大を図った。神田駅北口に地下1階、地上4階の校舎を完成させた。翌年に東京オリンピックの開催を控え、ちまたでは英会話ブームが起きていた。教室数を増やし、生徒を大勢募集するというスケール感のある学校経営の始まりである。慶應大学を中退後、自活をしていた隆治も学校経営に参画。昭和39（1964）年、学校名を神田外語学院に改称する。若い学校だが、伝統的なイメージを含ませたいという隆治の提案だった。

この年、公一はヨーロッパに視察旅行に出かける。ドイツでは実務教育に関する研究会に参加した。昭和42（1967）年にはカナダのプリティッシュコロンビア大学の外国語教育研究会に出席。北米の教育を視察した。

昭和44（1969）年、公一は大きな決断をする。それまでいわゆる私塾だった神田外語学院を学校法人にしたのである。街の英会話教室を正式な学校にしたのだ。その決断には、当時事務長を務めていた隆治も驚いた。

写真上：神田外語学院昭和44年度
卒業式（佐藤武揚氏提供）

語学教育の最前線

神田外語学院

若者の“波長”をつかめ



外国語の学習に世界で初めて導入されたCAI(Computer Assisted Instruction)システム。コンピュータからフタウン音を通じて個人個人の能力にあわせて問題が提示され、その個人の正誤もコンピュータが判定する

写真下：コンピュータによる英語学習システム「CAI」は約5年の歳月をかけて開発した。（「若者の“波長”をつかめ」『季刊中央公論 経営問題秋季号』、中央公論社 昭和53年9月号より）

「数年前から親父は『学校は学校法人にしたほうがいい』と言うようになっていた。振り返ってみると、あのときの親父は偉かったと思います。学校法人にするってことは財産を国に寄付するのと同じことです。もう、学校が個人のものではなくなるんですよ。普通は個人塾で儲けていたら、寄付なんかしないですよ。それも全財産を投げ打った。僕だったら踏み切れたか分からないですね」

そして、公一は学校法人化を機に名前を変えた。実は、佐野公一の本名は、「和一（わいち）」であった。学校法人を運営する自分を「公人」として定義するべく、その後の通り名を「公一」にしたのである。

同じ年、地上7階、地下1階の本館が完成した。視聴覚施設を完備する新校舎は800人が学べる大規模なもの。だが、従来の英文秘書科と実務英語科だけでは教室は埋らない。後にキャリアカレッジの校長となる佐藤武揚が企業のニーズを調べ、国際ガイド科や国際ホテル科、スチュワーデス科などの新学科を開設した。語学教育と職業訓練を融合する新しい学びを提示したのである。（4/7）

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第19回 佐野公一 神田外語学院初代学院長
日本を想い、人づくりに懸ける



人格を磨く教育を実践し、
日本最大の専門学校に成長

昭和40年代の終わりになると、公一は英語の教育法を専門に学んだ外国人講師を大勢採用し始めた。欧米の大学に手紙で打診して、現地で面接を行う。公一は、教員に応募してきた外国人の顔を見て、誠実な人物かどうかを判断したうえで、履歴書を確認したという。学歴や業績よりも人間性を重視した。公一は採用後も、外国人講師を厳しく指導した。水野五行前学院長はこう回想する。

「公一先生は、厳しい方でした。外国人教員に対してもお構いなしです。長い髪をボサボサにしている教員がいれば、髪をグイとつかんで、『ちゃんと束ねろ』とおっしゃる。控え室のロッカーが半開きになっていれば、『こういうのは日本じゃ「アホの三寸開き」って言うんだ』とおっしゃった」

公一には外国語を教えるだけでなく、「人を育てたい」という強い想いがあった。前出の文藝春秋の記事で、学生たちへの教育について、公一はこう語っている。

「言葉は人格を表しますね。人格のともなわない言葉は不愉快ですよ。わたしは学生に、外国語を習うには、ただサル真似ではダメですよ、人格をみがくことを第一として、言葉の勉強しなさいといっているんです」(※3)

写真上：神田外語学院ではネイティブ教員を採用するとともに、最新機器を導入した設備を整えた。



A 入学式のオリエンテーション

学院生活は4月19日の入学式に始まる。最初の2年(2年)には圧倒的に苦者が多い。合宿、ハイキング、海外研修、サマースクール、スピーチコンテスト等、さまざまな“ふれあい”の機会がある。留学スペシャリストとしての特色を生かし就職前課も英語、貿易、金融、流通、運輸、ソフトウェア等の特長。業界は大学前、卒業後も就職先も広がっている

撮影・本社 増山武久

4
神田外語学院

憧れの職業のスキルと使える英語を学ぶ魅力的なカリキュラム。外国人講師が教える生きた英語。CAI (Computer Assisted Instruction) など、先端の機器を導入した教育設備。そして、学力の評価は厳格で、マナーにも厳しい教育方針。神田外語学院の教育は評判を呼び、学生数はうなぎ登りに増えていった。最盛期には昼間、夜間を合わせ約6,600人にまで上った。

昭和51 (1976) 年1月、専修学校法が施行された。高等学校を卒業した者が、職業に必要な専門課程を学ぶための専門学校が認められたのだ。神田外語学院はいち早く認可を得た。だが、公一はこの時期から大学設立を主張し始めた。専門学校として成功していたのに、なぜ大学を創りたかったのだろうか。(5/7)

3. 「大蔵トップ対談 私はこうやる 神田外語学院」より

写真下：学生数は最盛期には6000人以上を数えた。(ともに「若者の“波長”をつかめ」『季刊中央 公論経営問題秋季号』、中央公論社、昭和53年9月号より)

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第19回 佐野公一 神田外語学院初代学院長
日本を想い、人づくりに懸ける



英語の潜在能力を伸ばすために
専門学校から語学講師を輩出する

昭和53年9月に発売された『中央公論』で、公一はハワイ大学の西山和夫准教授（経営学）と対談を行っている。『若者の“波長”をつかめ』と題されたこの記事で、公一は大学教育における最初の2年間の教養課程によって、学生の心が学校からいかに離れてしまうかを指摘したうえで、こう語っている。

「生徒はどんどん逃げる。逃げれば先生も興味を失ってきて、教壇はますますさびれる。これは歎かわしいことです。それで二年経って、今度は専門をやろうとする時期になっても、二年もの空白があるわけですから、それこそ生徒の方でも波長を合わせるできない」（※4）

公一は、人々が求めるものを直感的に察知する能力を持っていた。言わば、それは「波長」を感じる力だった。神田外語学院では、英語を話すことに憧れ、世界に目を向けようとする数多くの若者たちが学んでいる。だが、大学では若者の波長をつかめずに、その可能性をつぶしてすらいるように公一の目には映ったのだろう。公一は、前出の『文藝春秋』の対談でこう語っている。



「それ（英語の潜在能力）を顕在化するのが、我々の役目ですよ。中学、高校の先生で英語を話せる人は非常に少ない。今までの日本の語学教育のありかたではしかたのないことです」「語学の教師はやはり聞く、話す、読む、書くという四つの力をすべて備えた人でなければならぬ。私は中学と高校の語学教師は専門学校から送り出す、という実績をつくりたいと思っています」（※5）

中学、高校の英語教員を養成したい。だが、公一の想いとは裏腹に、専修学校法が施行されたのにもかかわらず、4年制大学は専門学校からの編入は認めなかった。その現実に直面したとき、公一の心の中に大学を創りたいという想いが生じたのはごく自然なことだったと言えるだろう。（6/7）

4. 「若者の“波長”をつかめ」（『季刊中央公論 経営問題秋季号』、中央公論社、昭和53年9月）P267
5. 「大蔵トップ対談 私はこうやる 神田外語学院」より

写真下：オピニオン雑誌で自身の教育論を展開する公一先生。「若者の“波長”をつかめ」（『季刊中央公論 経営問題秋季号』、中央公論社、昭和53年9月号より）

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第19回 佐野公一 神田外語学院初代学院長
日本を想い、人づくりに懸ける



大学設立に向けた情熱と
幕張の地に残された意志

公一は、大学設立に向けて、教育機関としての神田外語学院の存在感を示すために、神田外語学院での教育研究の成果を次々と公表し始めた。昭和50年にはフランスのマルセイユで開かれた世界学術会議で、CAIについての発表。昭和50年から52年にかけては、『東京都専修学校各種学校協会研究紀要』で、学院が巨額を投じて構築してきた独自の教育法を論文として次々と発表していった。

そして、昭和52年から53年にかけて、オピニオン誌である『文藝春秋』『中央公論』の誌面で評論家や研究者と対談を行った。どちらもPR記事である。自らがメディアに登場し、知識人たちと対談をすることで神田外語学院の存在を世にも強く示したい。ふたつの記事からは、公一のそんな強い意志が感じられる。

大学設置に向けて独自に調査を始めていた佐野隆治は、千葉県企業庁が幕張の埋立地に教育機関を招致する計画を知った。昭和53（1978）年10月3日、公一は、きく枝と隆治とともに現地を視察した。葦の茂る湿地を目の前に、公一は、「ここに大学を建てるんだ」と言った。だが、その場で体調を崩し、緊急入院。10月18日に息を引き取った。

写真上：大学の用地を探していた時期の
佐野公一先生、きく枝先生。

（神田外語学院校友会『平和の礎』より）



写真下：神田外語大学1号館エントランス
にある佐野公一先生の胸像
(撮影：塩澤秀樹)

前出の雑誌『中央公論』が出版されたのは、公一の死のわずか1カ月前だった。公一は、日本の社会全体が政治的な議論ばかりに偏り、教育の根源的なものが忘れられてしまっていると指摘したうえで、自らの決意を述べている。

「私は国の教育方針がどうあろうと、私どもの学校だけは、これが教育なんだ、というようなものを追求していきたいと考えています」(※6)
(77)

佐野公一（さのこういち）

明治38（1905）年生まれ。中央大学法学部卒業。昭和10年代に「佐野商店」を興し、戦後は貿易や喫茶などの事業を手がけた。昭和32(1957)年に英会話学校を設立。神田外語学院初代学院長に就任し、同校を日本最大の外国語専門学校に育てあげた。昭和53（1978）年10月、逝去。享年73歳。晩年は大学設立に情熱を燃やし、「千葉港、成田空港、文化は海の岸辺から始まる」という言葉を遺した。

6. 「若者の“波長”をつかめ」P267